
その扉の向こうがわ

水音灯

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

その扉の向こうがわ

【Nコード】

N5736B

【作者名】

水音灯

【あらすじ】

誰もがよく知っている扉。その扉の向こうには、異世界が広がっていた。俺は、ただ独り、しかも素手でその世界の光を見出さなければならなかった。

(前書き)

食事時のご高覧は、あなたの食欲を損なう恐れがありますのでご注意ください。と言っても、食事場面は一切登場いたしません。

その扉の向こうがわ

逃げ出したい自分を何とか励まして。
俺は、“それ”の前に足を踏み出した。

世界がぐらりと傾いた気がして、視線を落とす。
揺れているのは、ありふれたフローリングの床なんかじゃなかつた。

いつそ、そうであればどんなによかったことが。
震えているのは、俺の膝だった。

ああそうだ。
昨日の部活で筋トレしすぎたんだよ、調子に乗って。

そんなごまかしが脳裏をよぎり、すぐに朱で修正される。
昨日も今日も明日も、俺は帰宅部だ。
筋肉痛と親しくなるほど筋トレをすることはまずない。
・・・親しくなりたいとも思わないが。

本道からそれだした思考を現実に引き戻す。
手ぐすね引いて俺を待ちつけている悪夢に、怖気が走った。

勇気を振り絞るんだ！
RPGの勇者だって、木の棒だとかそんな貧弱な装備で村を追い出されるじゃないか。

自分に言い聞かせながら、頭を上げる。
目の前にあるのは、どこの家庭にもあるような、金属製の白い扉。

う。
クラスの平均的な身長を誇る俺の視線と同じ高さで、取っ手が誘

なにぐずぐずしてるの？

脳裏をよぎったのは、自称女神から投げかけられたばかりの言葉
だった。

その響きの冷淡さにヤケになった手が、取っ手に伸びる。
触れる直前で慌てて引っこめた。

待ってくれ！

まだ覚悟が決まっていないんだ。

頭の隅でわめく弱さを、振り払いたくて首を横に振る。

…そう。

俺は、知っている。

誰よりも、知っている。

この扉の向こうに広がる、絶望に支配された世界のことを。

開けるべきか、開けないべきか。

問題は……、そんなところにはない。

この扉を開けたら最後、後戻りは許されないのだ。

深く息を吐いて、吸う。

無意味な行為だ。

分かっている。

分かっているながら、俺は深呼吸を繰り返す。

他に心を落ち着ける手段がないのだから仕方がない。

そうして、なんとか震えが治まった手を伸ばして、その扉を開けた。

20秒後。

俺は、自分の行動を深く悔いていた。

「……1998年、9月28日」

目に映った年月を口に出しただけで、身体が震える。

せめて言葉にしなければ…、これほどまでの戦慄せんりつを覚えずに済んだはずだ。

ああ、やはり。開けてはならない扉だったのだ。

知ってはならない世界を知ってしまったような気分が、俺の身体を重くした。

誰が何と言おうと、どれほど頼まれようと、たとえ脅されたとしても、踏み込んではない領域というものがこの世には存在する。出来るものならそれを、30分前の自分に懇々こんこんと諭してやりたい、と俺は思った。

だが、同時に。

選択の時はとっくに過ぎ去ってしまったことも、俺は知っていた。扉を開けてしまった今、道は1つしか残っていない。

とりあえず、常に意識しておかなければならない事実は、たった1つだ。

それだけが俺の味方で、武器だった。

それさえ忘れなければ、どうにかな……らなかったらどうしよう。いや、強気で行け！ 行くんだ俺！！

今なら憂鬱ゆううつという漢字が辞書なくして書けそうだと自嘲じやうぢしそうになる自分を鼓舞こほし、俺は扉の向こうがわに向き直った。ただ1つの呪文を、武器として脳裏に思い描きながら。

2007年2月22日。

まぎれもなく、今日の日付だ。

俺に赦された装備は、それしかなかった。

扉を開けてから30分が経過した。

荒れ果てた世界は荒れ果てたままでそこにある。

甲高い怨嗟えんさの音が耳に痛い。

漂う腐臭に、下がっていくテンションを自覚する。

こんな心もとない防具で何をしろと言っただ！

叫び出したい自分を必死で律した。

何しろ素手だ。

頭と口元はかろうじて布で覆ってはいるが、そんなものが通用するような次元はとつくの昔に通り越している。

勇者ヒローだ、勇者ヒローがここにいる。

本気でそう思いかけた瞬間、俺は首を横に振った。

・・・いや、むしろ悪ザコキャラの権化だ。

誰だ、命は尊いとぬかしたのは。

その誰かを小一時間ほどかけて問い詰めたい衝動にかられて、俺は唇の内側を強く噛んだ。

この場を見れば、一目瞭然いちめくじょうぜんだった。

俺が積み上げた残骸が、かつて生きものだった、と。

そんなことが信じられるものか。

命が尊いと言つのなら、なぜ！
こんな事態になるのだろう。

俺のせいか？ ああ、俺のせいだ。

責任を、逃れることなどできようはずもないことは解^{わか}っていた。
この扉を開ける前から解^{わか}っていた。

この惨状を作り上げたのは、見知らぬ誰かではない。
俺の軽率な行動も、確実に一役買っているのだから。

俺が悪かった。

汚れきった手に眼を落として、誰にでもなく呟く。

誰にでもいいから赦^{ゆる}しを請いたい気分だった。

ぬめりを帯びた液体の付着した手からは、鼻が曲がりそうな悪臭
がする。

追い討ちをかけるかのように音量を増した怨嗟の響きに、吐き気
がこみあげてきた。

それでも、俺は手を動かし続ける。

バリツ……………、グチャ……………

絶え間なく響く、耳を覆いたくなるような音に責め立てられてい
るような気がして、俺は力なく首を振った。

いつの間にか染みついてしまった腐臭に、眉をしかめる。

なんてことだ、やはり安物のシャツを着るべきだった。

悔やんだ瞬間、謝罪の言葉を口にする資格すらもたない自分に気
づいた。

この手で作り上げた、かつて生きものだったものたちの山を見や
って、深く深く息を吐く。

その間にも身体は勝手に動き、気づけば終りがすぐそこまで来て

いた。

光が、見える。

茫然と、俺はその場に立ち尽くした。

見開いた視線の先に広がっているのは、もはや荒れ果てた異世界ではなかった。

清浄な白さに包まれ、灯りに満ちみちた儼かな空間だった。どうして忘れていたのだろうか。

この世界は、こつあるべきだった。

「……や、…やつ、た」

これで、終わりだ。

感動のあまり声がかすれた。

ひしひしと湧き上がる実感に、身体が震える。

俺は、やり遂げた。やり遂げたんだ！

そう叫びだしてもかまわないような気さえする。

未だ途切れることのない甲高い声が、いつそ耳に心地よい。

これで、この声ともお別れなのだ。

申し訳なささと寂しさが入り混じったような奇妙な感覚を受けとめながら、俺はこの手が作り出した骸の山を横目で見やった。

「九割……か」

痛恨の事実が、眼に見える結果となってそこに現れていた。

九割まで行くとは、考えもしなかった。

少なくとも四割は救い出せるだろう、と。

そう予想していた俺の甘さが作り上げた光景だった。

もう少し早く手を下していれば、無駄にせずすんだのだ。

善か悪か、と問うならば、俺は間違いなく悪だ。

罪悪感のあまり、目をそらすことすらできない視界には、それでも光が満ちていた。

白い、光。終る世界を、それでも照らす光。確認も兼ねて、俺はもう一度その光景を見つめる。

完璧だ、と思いながら、俺はもう二度と開けることはないだろう扉を閉じた。

これでいい、全ては終わったのだ。

そう思った途端、罪悪感を凌駕する爽快感にのみこまれた。鼻唄が、勝手にこぼれる。

いい気分だ、と不意に思った。本当に、罵^{ののし}られても仕方がない。

それでも、どうしようもなく気分は高揚していて、爽快だった。

この気分をぜひ、誰かと分かち合いたい。

そう考えた俺は、念入りに手を洗って携帯を手にとった。

悪友にメールを送ろうとして、しばし逡巡^{しゆじゆん}する。

どう書けば、この奮闘が伝わるだろう。あの恐怖と後悔と、嫌悪が。

……お前の家にも、その扉は存在する。

文字を打ち込み始めた右手が、不意に止まった。

いや。何か、重大なことを忘れているような感覚が、手を止めさ

せたのだ。

何も考えずに振り返った……瞬間、俺は激しく後悔した。

「……」

心の迷いだ、と思うことはできなかつた。

幻覚として受け流すこともできず、俺は茫然とその場に立ち尽くす。

勝手に唇からこぼれていく笑いを止めることができないう自分は、ひどく打ちのめされている、と思った。

現実の厳しさを、嫌というほど思い知らされた気分だった。

こんな割りに合わないことを引き受けた自分を、心底呪いたい。有無を言わず押し付けたお袋に、物申したい。

あんまりじゃないか。

あの惨状は俺のせいだけじゃないはずだ。

むしろ、片付けられないお袋のせいじゃないか！

五千円、返すから。

返すからもう生ゴミ処理は勘弁してくれ。

本当に限界だ。

精神的ダメージが酷すぎる。

新しい冷蔵庫が来るから、なんて理由で片付けられるわけがない。

その扉の向こうがわ

冷凍室

チルド室

その扉の向こうがわ

野菜室

白い扉は、あと三つ残っていた。

(後書き)

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。

水音灯と申します。

あなたが、そこに居てくださることが嬉しいです。

この作品を読んでくださって、ありがとうございます。

ご感想、ご批評、誤字・脱字のご指摘などいただけると嬉しいです

この物語の原型は、2006年2月15日に出来ました。

2007年、そして2008年7月の加筆修正を経て現在の形に
なっています。

恐怖を作り出すのは、常に人間です。

あなたの家にも存在する扉。

その扉の向こうは、直視できるような場所ですか？

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5736b/>

その扉の向こうがわ

2008年8月29日18時41分発行